



検事としての仕事の魅力

検事の仕事に関しては、大変責任の重い、しんどいものではありませんが、犯罪が加害者・被害者のいずれにとっても人生の一大事であり、それを重く受け止めてながら、適正に捜査・訴追し、裁判を通じて正義を実現するために自分のベストを尽くすこと、一方当事者たる法律家として対処していくことには大きな意義があるものと考えており、自分の仕事として選択してよかったと思っております。

しかし、自らの経験を振り返ると、捜査や公判がうまくいった時のことよりも、自分の力が足りず、十分な証拠の収集ができずに起訴できなかった事案や、被害者の思うところを十分に裁判所に伝え切れなかったことなどを多く思い出します。それらを糧に、次こそはなどと思いつて続けてきたように思います。また、私は、法務省の法務総合研究所の国際協力

自分の選択を後悔しないで進みたい

私は、司法修習生になった年に結婚し、翌年修習中に長女を出産しました。修習中であつたため、特別の産前産後休暇はなく、産後のみ約1か月お休みをいただきました。当時は、検事に任官する女性は極めて少なかったのですが、検事に任官しました。長女は実家に預けて自らは2、3年毎に各地に転動しました。



【Profile】

昭和57年	検事任官(横浜地方検察庁)
平成元年	休職、米国留学(2年)
平成3年	検事復帰(仙台地方検察庁)
平成8年	法務省法務総合研究所国際連合研修協力部(教官)
平成12年	札幌地方検察庁公判部長
平成14年	法務省法務総合研究所国際連合研修協力部(次長)
平成21年	法務省法務総合研究所国際協力部長
平成22年	函館地方検察庁検事正
平成25年	法務省法務総合研究所国際連合研修協力部長
平成26年	法務省法務総合研究所所長

その後離婚して単身になりましたので、娘はその後両親に預けていました。その意味では育児、家庭との両立で苦労したことはありません。両親には、娘を一人前に育ててもらったことに対する感謝の念でいっぱいです。育児休業休暇もない時代でもあり、また、転勤があることは当然のこととして検事に任官したので、検事を続ける以上、転動しない選択肢はないと思い、むしろ、両親に育ててもらったほうが娘のためであると割

に関する分野において、教官等として合計9年近く働き、日本が国際社会における法秩序の維持、持続的発展に貢献することの重要性を学びました。それとともに、日本の国際社会への貢献が、国際社会の日本に対する信頼や尊敬にもつながり、ひいては日本の安全や安心にも寄与し、日本の安定的な発展を国際社会が後押ししてくれることも体験的によく分かりました。検事に任官したからこそできた仕事とします。また、検察においては、上司や先輩、仲間にも助けられ、任官後20年近くたって初めて管理職を経験させていただき、その後は法務総合研究所における管理職なども経験させていただきました。検察における管理職は、現場の指揮官でもあり、とてもやりがいがありましたし、法務総合研究所においては、幅広い業務に関係することができ、視野が広がったように思います。いずれにしても、私にとって検察の現場の経験は最も重要なものであり、今の自分を形作っていると思っております。

係長・課長補佐時代に やっていたよかったこと

米国留学や国際協力業務等を通じ、海外の司法制度等について少し勉強したことが今でも役立っております。

企画官・課長時代に やっていたよかったこと

以前から休みの日はなるべくジョギングなど軽い運動をし、体調の管理及び気力の維持に努めています。

働く原動力

現場の検事時代は、ペアを組む立会事務官と仕事を仕上げると思うと力が出ました。今も常に仲間を意識しています。

仕事を効率的に 進める方法

仕事を溜め込まないで、できる限り早く手を付けることにしています。そうすれば、次の一手が見えてきます。

後輩の働く女性への メッセージ

一生懸命に仕事をする、してしまった失敗については長く引きずらず、次また頑張ることをお勧めします。努力を続ければ、必ず誰かがどこかで見てくれており、温かく指導し、協力してくれると思います。

自分の選択を後悔しないで、 前を向いて進みたい



法務省
法務総合研究所長

赤根 智子
あかね ともこ